

山梨県水産技術センター便り

年度の始めにあたって

所長 高橋 一孝

水産技術センター所長を拝命し、2年目となりました。年度始めにあたり1年の抱負を述べたいと思います。人事面では次長や総務担当リーダーの交代、若手研究員1名の退職がありました。また、年度途中ですが同じく若手研究員1名の休職が予定されておりますので、研究部門での大幅な戦力ダウンは否めません。予算面では規模は昨年並みですが、支出を考えるとやはり電気料金の値上げが大きな痛手です。昨年にも増して節電などに留意し、効率よく適切に予算執行していきたいと考えております。

さて、社会情勢を見ると、「アベノミクス」の反動か、ここへ来て株価の乱高下と円安に対する反発が見られます。既に日用品の値上がりなど物価上昇が続いています。好調な消費の失速に、警戒感が一層強まっております。

翻って水産業界はどうでしょうか。昨年お話ししました暗い話ばかりではなく、明るい話題も増えつつあります。西湖のクニマスの研究も次第に佳境に入ってきました。昨年度はクニマスの産卵場や産卵期を明らかにしましたが、まもなく資源量についても算出できそうです。京都大学による遺伝子解析手法の研究報告がなされ、当所の研究の進展にもさらに弾みがつきそうです。また、新たに東京海洋大学が開発した借り腹技術を応用し、ニジマスやヒメマスにクニマスを作らせる実験も、マイクロコンピューターなどの装置を使って開始します。現在、平成24年1月に作った稚魚も体長18cmの大きさまでに成長し、700尾ほど飼育しております(写真)。順調に成長しておりますので、早くも2世の誕生が期

待されているところです。関連する水産行政の動きとしては、西湖でのクニマス展示施設設置場所の調査が予定されており、今後クニマスが量産化されれば、養殖クニマスを活用した地域振興策に向けての議論も高まってくることでしょう。



写真:体長18cmに成長したクニマス

大型で赤身の魚「甲斐サーモン」については、養殖漁協の調べでは年間20トン程度の生産量ですが、今後研究中の「ブドウ搾り粕」をエサに混ぜることで肉質の改善効果が期待できることが判ってきたので、「甲斐サーモン」も、より一層の付加価値をつけた特産魚に変貌するかもしれません。また、JAふじかわで養殖が始まった「ふじかわもろこ」への種苗の供給や技術指導も重大事です。この他、増殖技術関係では、県産アユ種苗特性評価試験、人工産アユによる未利用水域活用技術開発試験があります。カワウ等鳥害対策関係では、擬卵・ドライアイスを利用した駆除を進める一方で、漁業被害の軽減策として紙粘土を使った簡便な擬卵作成と効果実証などを行います。また、河口湖、山中湖においては、ワ

カサギ増殖のためにプランクトンなどの基礎調査を進めます。

一方、養殖技術関係では、付加価値を付けた販売や消費拡大に繋がるような新養殖魚種開発研究（サケ科魚類の異種間交配魚の開発試験、低魚粉飼料での優良成長系ニジマスの作出試験）に取り組んで参ります。

今年度、農政部の取り組み方針として、「儲かる農業」の深化、国の施策「攻めの農林水産業の展開」、「定住促進」に向けた施策展開を掲げ、10年先を見据え展開する山梨農業の基礎をつくとあります。具体的なチャレンジミッションとして7つの重点項目をあげ、そのひとつに「クニマスなどを活用した内水面漁業の振興」があります。これを見ただけでも水産への期待の高いことが窺われるのですが、それだけに重圧でもあり、やりがいを増すものでもあります。海なし県の「淡水魚」や「水産業」も、益々注目されているといった感じがします。幸いにもH26年には研究職の新人が2人入ってくる予定です。今年一年は前述したとおり欠員となるため業務的には大変ですが、昨年同様、関係者皆様のご意見・ご要望を頂戴しながら効率的な研究の推進と、研究成果の迅速な普及に向けて、職員一同、力を合わせて取り組んで参ります。どうかよろしくお願い申し上げます。

退職のご挨拶

前 山梨県水産技術センター 研究員
現 (独)水産総合研究センター
増養殖研究所 研究員

坪井 潤一

平成15年4月1日からの丸10年間、本所で溪流魚の保全、カワウ被害対策、アユ種苗生産と、様々な試験研究をしてきました。このたび独立行政法人水産総合研究センター増養殖研究所(栃木県日光市)に勤務

することになりました。センター便りの最後の原稿になってしまうのが大変残念ですが、これまでの仕事の思い出を振り返りながら、退職のご挨拶をさせていただきます。

初めて漁協の皆さんと仕事をさせてもらったのは山中湖での地引き網でした。帽子をかぶり、てぬぐいを首に巻いていたこともあり、私が昼休みまで女性だと思われていて、山中湖漁協の皆さんをガッカリさせてしまったことを鮮明に覚えています。

平成16年からの5年間、カワウ被害対策の技術開発とその実用化を行いました。テレビや新聞に取り上げられる喜びを知ったのもこの頃でした。カワウを釣り針で獲る手法の開発では、山梨中央漁協の宮澤さんにご協力いただきながら釜無川に通い詰めました。講習会では60名を超える方々に参加していただきました(写真)。



写真:平成17年1月14日に開催された
カワウ釣り針捕獲講習会での1コマ

平成21年からの4年間はアユの種苗生産を担当しました。4シーズンとも180万匹の需要に応えられることができ、本当に良かったと思っています。また、河川環境の変化に応じて、放流場所を上流域や支流域へシフトさせていくことの大切さを、漁協の皆さんに指導させていただきました。アユ種苗生産担当を離れた現在も、山梨県内のアユの釣れ具合が気になり、各釣り場のブログをチェックしています。

山梨県でのキャリアを生かし、これからも内水面の現

場で喜ばれる研究や技術開発をしていきたいと思
います。近い将来、皆さんにその成果をご披露できれ
ばと思っています。10年間、本当にありがとうございました。

種苗の購入による魚病の侵入防止について 主任研究員 名 倉 盾

養殖業者の皆様におかれましては、今年も水産用
医薬品使用状況アンケートにご協力いただきありが
うございました。アンケート用紙を送付した封筒に同封
してありましたとおり、種苗を輸入する際には魚病
を持ち込まないように注意してください。

最近、海の養殖魚や貝類について海外から来た魚
病が大きな問題になっています。

マス類を頻繁に海外から輸入することはあまり考
えられませんが、観賞魚として様々な魚が海外から
輸入されてきていますし、ギンザケや一部ニジマス
も海外から種卵が入ってきています。

マス類の病気で近年では、チリに侵入した感染性
サケ貧血症(ISA)が猛威をふるい一時的に輸出が滞
ったほどの被害を出しました。このように新型疾病
の侵入は恐ろしいものですが、旧来から知られて
いる病気も地域によって型が違うことがあり注意
が必要です。日本のIHNVウイルスは特に多様な型
があるといわれており、一度かかっているからもう
IHNVにはかからないと思
っていると、違う型のIHNVには感染してしま
うことがあります。さらにピブリオ病ワクチンの有
効期間が180日になっているように、抗体がいつ
までも病気を防いでくれるわけではありませ
ん。コイについてはKHVと並んで警戒すべき春
コイウイルス症(SVC)は、KHVと異なり、コ
イ以外の魚にも感染することが知られています。こ
のため、観賞魚のルートからの感染を十分警戒
する必要があります。

魚病が侵入する機会というのは、種苗の取引を
している以上、必ずあることです。これをいかに
して防ぐかが重要なのですが、これをすれば大
丈夫とい

う魔法の薬はありません。

普段から行っている日常の防疫体制をしっかりと
行い、たまには見直すことも必要です。たとえば、
消毒用エタノールは、消毒するのに1分間エタノ
ールが手についていなくてはなりません。手にシ
ュッシュとエタノールを噴きつけて、すぐにタ
オルで拭いたりしていませんか？ 足元を消毒
する踏み込み槽の消毒液を入れたのはいつでし
ょう？ 直射日光や泥などの有機物は消毒効果
を失わせてしまいますが、蓋の設置や定期的な
消毒液の交換は行っていますか？ 小さな作業
の積み重ねが確実な防疫につながります。これ
くらいなら…と思わずに、出来ることを確実に
こなしていくようにしてください。

また種苗を購入する時には、病歴の確認などを
しっかり行ってください。ちょっと心配な魚を
購入しなくてはいけない時は、最下流の池に入
れるなど注意が必要です。

コイについては、輸出をする養殖場の方はガイ
ドラインがありますので、それにのっとって適
切な対応をお願いします。輸出をしていない
養殖場の方も、常に魚病のことを考えながら
取引を行うようにしてください。

また、魚の様子がおかしいなど思った時には、
すぐ水産技術センターまでご相談をお願いします！

平成24年度日本水産学会論文賞の受賞 支所長 大 浜 秀 規

日本水産学会は、創立80周年になる日本で
一番大きな水産関係の学会です。学会では、
毎年度その功績に応じ、各賞の表彰を行な
っています。論文賞は、学会誌に掲載され
た論文の中から優秀なものを表彰する
もので、平成24年度は208編の中
から7つの論文が選ばれ、その内の
一つがセンター職員の投稿した論文
でした。

論文名は「本栖湖に密放流されたコクチバス
Micropterus dolomieu の根絶」で、当所
職員の大浜秀規、岡崎 巧、青柳敏裕、
加地弘一が執筆し、日本水

産学会誌 78 巻 4 号に掲載されました。

本栖湖では、平成 8 年にコクチバスが確認され、翌平成 9 年から平成 16 年にかけて、コクチバスの駆除を行ない、その結果コクチバスは平成 13 年以降採捕されず、また平成 16 年以降は目視されることもなくなったという、当時緊急の課題であった本栖湖におけるコクチバス根絶過程を論文としてまとめたものです。

論文賞の選考会においては「違法放流された本栖湖の個体群を駆除・根絶するまでを科学的に解析するだけでなく、その実際を記録したものであり、生物多様性保全という面から高く評価されるべき研究」と評され、なおかつセンター単独の研究ということで強く推す声が数多くあったと聞いています。

これは論文が上手にかけていたと言うよりは、当時駆除を行なっていたいただいたダイバーや本栖湖漁協の皆様を始め関係者の努力の成果が実り、それを確実に記録できた点が評価されたのだと考えています。関係者の皆様にはこの場をお借りして再度御礼申し上げます。

センターでは今回の表彰を糧に、現場の要望に応え、現場で役に立つ調査研究をさらに進めていきたいと思っておりますので、今後とも皆様のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。



カワウ対策の決定版が出版

支所長 大浜 秀規

今春「空飛ぶ漁師カワウとヒトとの上手な付き合い方」と題した本が発売されました。この業界には「カワウなんかと付き合いたくない！！全部やっつけちめーし！！」なんて方が多いかと思いますが、チョットお待ち下さい。著者は 3 月まで当所の職員であった坪井さんです。山梨へ就職してカワウ対策担当になり、研究し・悩み・チャレンジしながら、(カワウのように)大きく羽ばたきました。本書ではカワウ被害の真相とその解決策を探り、山梨のカワウ対策を、日本のカワウ対策のレベルにまで引き上げていった過程がテンポ良く書かれています。

また、本書はカワウ問題だけでなく、その背景にある河川環境の問題についても、鋭く考察しています。とても読みやすい本に仕上がっていますので、漁協関係者を始め遊漁者や鳥愛好家の人を含め、ご一読をお勧めいたします。出版は成山堂書店、価格は 1,890 円になります。



「今年も一斉追い払いが実施されました」

研究員 谷 沢 弘 将

一斉追い払い結果

カワウ一斉追い払いは今年で8回目を迎えました。平成25年5月8日(水)から同17日(金)までの10日間、11漁協、延べ1000人近くの方が参加して行われました。参加した11漁協のうち、10漁協管内でカワウの飛来数が減少しました(図1)。このことから一斉追い払いの高い効果があらためて実証されました。一方、1漁協管内で一斉追い払い終了後に飛来数が増加しました。原因としては、近場でねぐらが確認されたため、そこを起点にカワウが飛来してきたものと考えられます。現在、そのねぐらは消滅済みです。

今後のカワウ対策

県内においては現在、新たにできたカワウの生息地を除去し、下曽根コロニー1箇所封じ込めています。ねぐらを除去するためには、早期発見が重要です。今後も生息地を1箇所封じ込めるため、各漁協の皆さんには、カワウのパトロールを定期的に行ってください。夕方、木にとまっているカワウを見つけたら、すぐに水産技術センターまでご連絡ください。

引き続き、時期と場所を限定した追い払いと繁殖抑制を継続し、県内で最新のカワウ情報を共有しながら、効率的な食害防止対策を行っていきましょう。

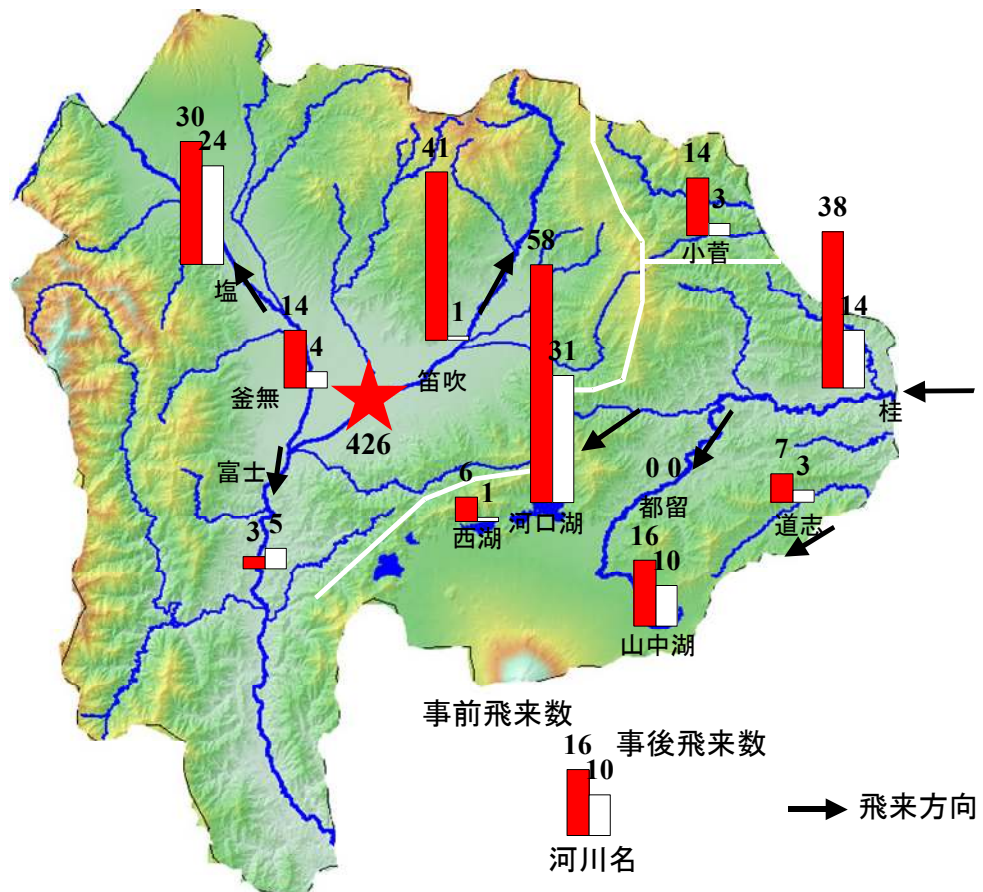


図 追い払い前後での山梨県内各地の飛来数。→は主な飛来方向、星印は県内に1つあるねぐら兼繁殖コロニー(下曽根コロニー:富士川水系)。白線は分水嶺。河川名については「川」を省略。

平成25年度の組織体制

平成25年4月1日付け人事異動で、今年度の体制は次のとおりとなりました。

本所（14名）

所長 高橋 一孝
次長 沢登 昌彦（転入）
主幹 田中 昭彦：総務（転入）
主任研究員 岡崎 巧：増殖
主任研究員 青柳 敏裕：養殖
研究員 加地 弘一：養殖－アユ（転入）
研究員 谷沢 弘将：増殖－カワウ（昇任）
主任技能員 大森 洋治
臨時職員 小林 伝
臨時職員 岩部 奈津美
臨時職員 吉野 健司
臨時職員 望月 進
臨時職員 深沢 良江
臨時職員 若林 匡久（採用）

忍野支所（7名）

支所長 大浜 秀規
主任研究員 名倉 盾：養殖－マス類
研究員 加地 奈々：希少魚（水族館）
主任技能員 羽田 幸司（昇任）
非常勤職員 宮内 聡
臨時職員 天野 元枝
臨時職員 渡邊 由美子

転出

駒井 泰子（障害者相談所主査）
芦澤 晃彦（花き農水産課技師）

退職

次長 河田 順雄
研究員 坪井 潤一

平成25年7月5日発行

本所

〒400-0121 甲斐市牛匂497
TEL 055-277-4758 FAX 055-277-3049
E-mail: suisan-gjt@pref.yamanashi.lg.jp

支所

〒401-0511 南都留郡忍野村忍草3098-1
TEL 0555-84-2029 FAX 0555-84-3707
E-mail: suisan-osn@pref.yamanashi.lg.jp